



## 認知症オレンジパートナーの活動紹介

※認知症オレンジパートナーは、認知症の理解者(認知症サポーター)にとどまることなく、より積極的で、実践的な活動を行うボランティアです。

認知症オレンジパートナーの今川和男さんにお話を伺いました。

### 【オレンジパートナーとして活動を始めたきっかけ】

私は、第二の人生で介護の仕事を選びました。この仕事を通して、日々経験する事や得た知識を仕事以外にも役に立てたいと思い、オレンジパートナーになりました。

この活動を始めて12年になります。インドネシアから技能実習生として、同じ職場で働く女性が「自分も活動したい」と申し出てくれて、一緒に参加するようになったことも、私にパワーをくれました。この活動に多くのことを経験させていただき感謝しています。

### 【オレンジパートナーとしての活動をご紹介します！】

「よこすか若年性認知症のつどい」と「認知症カフェ・タンポポ」に参加しています。

つどいでは、認知症の方と一緒に近くの散策や買い物、ゲーム、作品づくり等を行っています。コロナ前は、8月のカレー作りが定番で、家族の方も一緒に賑やかな恒例行事でした。コロナ禍を経て、カレー作りはできていませんが、みんなで楽しんでいきます。

10月は、認知症の方の手解きを受けてのコラージュ作りと、ヴェルニー公園での散策をしました。コラージュは、それぞれが自分なりにテーマを決めて作品を仕上げ、素晴らしい作品ができました。一方、公園に出かけた方は、「久しぶりによく笑った」と好評でした。

その時の体調や気分で、必ずしも同じ事への参加を強制するのではなく、希望に沿うような過ごし方をさせていただくことを大切にしています。

こうした活動の中で、オレンジパートナーは使用する備品の準備や当日の役割を話し合って参加していますが、何より『我々も一緒に楽しむ』という共通認識を持っていることが、活動の要になっていると思います。



人形劇を披露する今川さん(右)

### 【偏見の無い社会をつくりたい】

あるつどい的一幕。認知症の方がご自分の前に座っている方に、「お宅、認知症のどんな症状が出ているの」と質問され、質問された方は「私じゃなくて女房なんです」と。「どうして奥さんを連れてこないの、来れば楽しいのに」と質問を続けられ、いろいろなやり取りののち「今度、女房を説得して連れてきます」と笑いながら仰っていました。私は、この会話を聴いていて、全く自然な流れと偏見のなさにはビックリしました。

『認知症』という言葉には、ほとんどの方が敏感に反応されます。これは、認知症に対する偏見が大きく影響していると思います。私は、縄文時代のように、障害のある人もない人も、自分たちの生活を支えるために、協力しあうことが偏見をなくす一番の近道と考えます。また、現在、超短時間雇用モデルが研究され、一部で実施されています。働ける人、働けない人、働きたい人、働きたくない人さまざまですが、働きたい人が社会に出て働ける社会の創生こそ、認知症の方への偏見を払拭できると思います。これは、デイサービスでBLG(※)の活動を通して強く感じたことです。

(※)B(Barriers 障害)、L(Life 生活)、G(Gathering 集う場)の略。認知症とともに生きる人が、地域社会で、仲間と一緒に、役割をもって暮らすための拠点を表します。

問い合わせ先:福祉総務課 地域力推進係 (046-822-9804)